五感と直観と霊性

五感は生得的（インネイト）である。

「生得的五感」という言い方を、わたしはする。

胎内から生まれ出て、おっぱいをさがすとき、あかちゃんは嗅覚でさがすという。胎内にいたときから母の声をあかちゃんは聞いていたという。生まれたばかりは視力が足りなくぼんやりだが、明るさはわかるという。ある大学病院の新生児室で、照明を夜間には暗くしたら授乳量が増えたという。新生児には原始反射が多く残っていることも確かめられている。

あかちゃんは五感で生きている。胎内から生まれ出たそのときから五感は備わっている。成長過程で備わるのではない。だから、五感の大切さを言うあまりに「五感を鍛えよう」のフレーズを聞かされるが、――五感はすでに備わっている。自ら得ている五感をさらに鍛えようというのなら、わかる。

宇沢弘文『社会的共通資本』
岩波新書 p127
//一人一人の子どもは、言葉を理解し、数学の考え方を理解する能力を生まれながらもっている。このような能力、理解力を生まれながら、インネイトなかたちでもっているわけである。//
＊インネイト innate
//生得的、あるいは先天的、本有的などと訳されている//

直観　辞書をひいてみよう。

//推理によらず・直覚的（瞬間的）に物事の本質をとらえること。直接に知り、また、判断すること。//新明解国語辞典第三版

ついでに **第六感**

//〔五感の働き以外によるという意から〕直観的に何かを感じる心の働き。勘。//新明解国語辞典第三版

//五感以外にある感覚の意で、順序立った判断ではないが鋭く物事の本質を直観する働き。直観。勘。//新潮国語辞典

これらのことから、直観＝第六感、ということだろう。本質をとらえる方法として、五感とは”別に”〈直観〉というものがあるらしい。となれば、「五感がすべて」とはならない。

デフォルト・モード・ネットワーク
＆ ひらめき

集中して物事を考える。こういう脳の状態をエグゼクティブ・モード・ネットワークという。「集中する」ほうが結果に近づけそうだ。一方、忘れ物がないか確かめたのちに戸締まりをし、出かけ始めて忘れ物に気づく。エグゼクティブ状態から開放され、デフォルト状態が機能したからだ。

ひらめきの機序をこのように説く脳神経科学者がいる。

生命の危機から身を守る生存機能として進化の過程でデフォルト状態が担保された。両状態ともワーキングメモリを使用するので、メモ書きの習慣でワーキングメモリを開放させれば、デフォルト状態が生じるというのだ。

※直観×直感
まぎらわしいが、ここでは区別した上で使用している。

霊性

そもそも〈感じる〉とは、どういうことだろう。〈感じる＝感性〉だろうか。〈感じる≠感性〉だろうか。〈感じる〉は感情の表出だが、〈感性〉は表出ではなく〈感じる〉も含めてそれを支える基底的観念というものであろうか。

〈感じる＝心の拠り所〉は納得できる。〈感性≠心の拠り所〉だろう。俗な言い方になるが、心の奥底、深いところで〈感じる＝心の拠り所〉は支えられている。つまり、〈感性〉によって〈感じる〉を取得でき〈心の拠り所〉となっている。言葉遊びに過ぎたところがあるかもしれない。

さて、この流れで〈感性〉は何によって支えられているのだろう。ここまでの議論で、〈五感と直観〉だろう。

ここまで記した上で、〈霊性〉を提案したい。五感や直観で説明できないものがあり、胸騒ぎとか、祈りとか、キリスト教では「神様に見守られて」のフレーズがあるように、あるいは、宗教を問わず、さらに無宗教と主張してやまない人も神や仏にすがるというか、日本人ならば手をあわせたことが誰しも経験的にあるだろう。それが〈霊性〉ではないか。〈感じる〉は〈霊性〉に通じる。信仰ある者は〈心の拠り所＝霊性〉の等式が成り立つのかもしれない。心は〈霊性〉にも支配されている。

褐色脂肪細胞組織

いわゆる"体脂肪"は「白色脂肪細胞組織」のことである。これに対して「褐色―」がある。体温保持に必要な熱エネルギーを産出する。裸が常態でなく衣服をまとうことで、成人になると、「褐色―」は極めて少なくなる（幼児期は多い）

たとえば〈はだし保育〉

あかちゃんの靴下は小さくてかわいい。しかし、靴下をはかせることで、足裏の感触は間接的になってしまう。あかちゃんには褐色脂肪細胞組織が備わっている。しかし、おとなになるにつれ少なくなるという。褐色脂肪細胞組織は体温調節にかかわっていて、乳幼児は寒さに強い。五感を大切にするという考え方からすれば、いつも靴下をはいたままというのはもったいない。〈はだし保育〉は理に適っている。

五感は 鍛えるのではなく、守り育てるもの

まず、生得的に備わっている五感を退化させないことが大切だ。退化させないことで、五感は育つ。〈はだし保育〉のように。

レイチェル・カーソン（1907-1964）は言っている。//「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではない//『センス・オブ・ワンダー The Sense of Wonder』

学校で知識を身につけるまでのあいだ、つまり、少なくとも乳幼児期は「感じる」体験が最も大切だと訴えかけてくれている。「感じる」が五感に通ずるものとすれば、「感じる」機会を多くもつことを”鍛える”と言っても間違いではないだろうが、誰にも備わっている五感をもっともっと育てようと声かけされているのだ。

五感のおぼえかた

左右どちらでもよいから手を上にあげる。その手（指）を降ろして目をさわる ①視覚。すぐ下の鼻をさわる ②鼻＝嗅覚（きゅうかく）。さらに、すぐ下の口をさわる（舌をさわるわけにいかない） ③味覚。手を耳にもっていく④聴覚。最後に、動かしていた手を開き⑤触覚を、手で代表する。〈目→鼻→口→耳→手〉手の動作を伴わせば、記憶しておかなくても、この順序で五感を導き出せる

言語化することで考える

向き合っている相手が目をとじる。「わたしが手にしている色紙は何色か？」と訊いても答えられない。

次に、「赤、青、黄、……、これは何の集まりか？」と問われれば、「色」と返答できる。「色」は目で確かめなくても答えられる。

あかちゃんが歩き始めたとき、ふらふらしてかわいい。おっと、こけた。そのとき手が出る。「あぶない」と思って手を出すのだろうか？　失礼ながら、お年寄りがこけそうになったとき、タイミング良く手が出るだろうか？　あかちゃんは「あぶない」という言葉をまだ覚えていない。でも手が出る。

あなたが道を歩いていてつまずいたら、おそらく「あぶなー！」と声をあげるだろう。一瞬のことでも言葉が出る。そして状況を判断をしようとする。

あかちゃんは、やがて言葉を覚える。五歳の子どもはこわいときは、「こわー」とか「あぶなー」と言う。口に出さなくても心に思う。つぶやきもする。

あまい、すっぱい、からい、にがい、おいしい、まずい、……、味覚は経験的にいろいろと単語で表現できる。

しかし、嗅覚は、「くさい」のほか、単語で表現できることは、どれほどあるだろうか。

言葉は話し相手に使うし、自分にも使う。言葉が使える人は、考えるとき、必ず自分に向かって言葉を使う。そのとき、知っている言葉だけを使う。知らない言葉は使えない。考えを深くするには、言葉を学んで身につけることを心がけておかなくてはならない。

五感を働かせるということは、こういうことである。五感で得た感性が直ちに言葉に置き換わるわけではない。五感を受け止めようとする意思がやがて言葉を生む。

子育ての公理

この公理は、山田利行のオリジナル

1. **生命の維持**　新生児および乳幼児が、生命を維持するには「食べる（授乳）・寝る・体温を保つ」の3つをすべて必要とする。

2. **保護の必要**　新生児および乳幼児は、保護される環境を必要とする。その「保護」とは、前項の「生命の維持」に加え、静穏な環境の確保、排泄介助、事故防止、誘拐からの保護をいう。

3. **順序どおりに発育する**
新生児および乳幼児の、発育は一定の順序どおりに進む。

※ 3項目セットで1つの公理とする。

なぜ、「公理」というなじみにくい用語をつかうのか？

出産は、本来、母子にとって危険な行為である。そして、幸いにも子どもが誕生し、育てる決意をすれば、次は「子育て」が待っている。

「子育て」は、むずかしいものであろうか。そうではないだろう。

多産多死という人類の軌跡に学ぶことはあるが、子どもが死ななくなって、少産少死になってしまうと、子育ての何が大事なのか、そういう原理がわからなくなってしまった。原理を確認しないままに子育てを進めようとするから、望むように進まないとき、子育てをむずかしいと思ってしまうのではないだろうか。

考える起点を確認するため「公理」を立ててみた。

地球上、ヒトであれば、文明・貧富を超えて、あるいは過去、ヒトの歴史においても、子育てに必要なことでは、共通するものがあるのではないか。

子育ては産み育てる側で使用する概念だが、生まれた子ども自身に視点を移せば、彼らにとって、少なくとも新生児の為すことは、ヒトであれば同じと考えてよいのではないか。

拡散歓迎　複写可（許諾無用）　https://193pub.com/